

A scenic view of a canal in Strasbourg, France, with historic buildings and a boat.

フランス・アルザスにおけるアルザス語の位置付け： ストラスブールの言語景観と聞き取り調査からの考察

東京大学大学院
総合文化研究科言語情報科学
博士前期課程1年
杉浦黎
rei.sugiura.alsace@gmail.com

日本フランス語学会第336回例会
2021年9月25日(土)15:00-18:00
Zoom開催

本発表の流れ

1. 研究の出発点：境界に位置するアルザス地域
2. 研究の目的・リサーチクエスチョンの提示
3. 先行研究：アルザスにおける言語研究
4. 先行研究：地域語アルザス語を取り巻く状況
5. 研究手法
 - 5.1. 言語景観研究
 - 5.2. 半構造化非公式インタビュー
6. 結果と考察
7. 結び：地域語アルザス語の未来
8. 課題

1. 研究の出発点：境界に位置するアルザス地域



図1 フランスの地図



図2 アルザス地域の地図

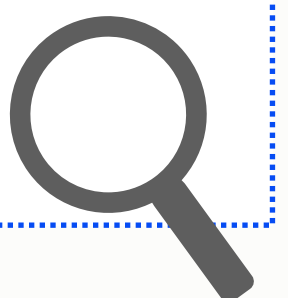


図3 Grand Est 地域圏

ストラスブール
Bas Rhin県の県庁所在地
ユネスコの世界遺産

1870-1945の間に4度の国境線の変更。
→母国語と母語の複雑な関係、言語が接触する地域

歴史的背景や言語をめぐる複雑な社会言語
状況は、現代アルザスのアルザス語使用へ
と影響を与えているのか(否か)？
どのように与えているのか？



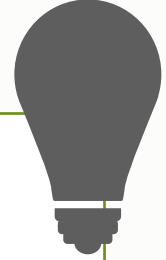
アルザス地域はドイツ(200km)、ス
イス(65km)と接している。

2. 研究の目的



- 本研究の目的は、「境界」に位置する都市における**言語使用**、それらの**言語への意識**を明らかにする。本研究では地理的かつ文化的にドイツとフランスの間に位置するフランスのアルザス地域、ストラスブールを調査地とする。そこでの言語状況、特に**地域語「アルザス語」**の捉えられ方に着目する。
- ストラスブール中心街の広場周辺における言語景観調査により公共空間における言語、半構造化非公式インタビューを通してアルザス語への認識を捉える。
- 以上から明らかになるアルザス語の現状を基盤とし、最後にアルザス語活性化への有効な方法を模索する。

2. リサーチクエスチョン



① 境界都市ストラスブールの公共空間ではどのような言語が、どのような意図で用いられているのか。

● →言語景観調査

② 地域語「アルザス語」は人々によってどのように捉えられているのか。

● →言語景観調査、非公式インタビュー



3. アルザスにおける言語研究

- アルザス語とフランス語のコードスイッチング (Gardner-Chloros, 1991)。デパート・小売店・保険サービス会社・学校での調査、会話分析。一つの会話の中でのコードスイッチングを観察。
 - 小売店では相手の話す言葉と相手との心理的距離によって、アルザス語が混ざるかどうかが決まる。→同じ場所であっても相手との親密度によってコードスイッチングが起こる。
 - 学校ではアルザス語とフランス語が混ざるとは少ない。若者（生徒）はアルザス語が分からない場合も多い。
 - 教師は混ざることが生徒に「良くない」と考えるため、フランス語を使う。アルザス語とフランス語を混ぜて使う学生が特権的、知的階級ではない家族の背景を持つとされる。"Such mixing of languages as does occur among the children is considered a bad thing, though this judgement is certainly related to the fact that those children who do speak the dialect and therefore are *in a position* to mix the two languages often come from less privileged or less intellectual home background (p.108)."
 - "If these speakers happen to be bilinguals, that is to say master some other variety as well to a greater lesser extent, then the sheer fact of that bilingualism is taken as the reason for their lack of mastery of the prestige language (p.108)." バイリンガルが「問題」として捉えられる。

3. アルザスにおける言語研究

- アルザス地域の言語教育→ストラスブールにおける学校教師の言語教育への意識、態度を調査。ドイツ語、アルザス語も含むフランス語以外の言語は、遊び場(playgroud)での使用は許されるが、教室(classroom)ではこれらは禁止されるべきでありフランス語の使用が絶対であるという強い単一言語主義的なイデオロギーを観察 (Young, 2014)。学校で使う以外の言語は（移民の母語、地域語アルザス語を含む）、家で使用する言語であり、フランス語からは明確に区別される。
- バイリンガル教育について (Harrison, 2018)、 “The revival of High German in and through the educational system will certainly increase bilingual competence in general (Bister-Broosen&Willemyns, 1998, p.15).” →アルザスにおけるバイリンガル教育がフランス語とドイツ語である点についての指摘。
- アルザス語のバリエーションについて (Steiblé&Bernhard, 2018)、 (Laeufer, 2012)、 (Boughton&Pipe, 2020)など
- 言語景観調査 (Bogatto&Hélot, 2010)、 (Burdick, 2012)
- →本研究はヨーロッパとフランスにおける地域言語政策、アルザス語の教育政策と話者数や使用状況の検討を踏まえ、アルザス語がどのように街の中で使用され、どのように人々の間で認識されているのかを導き出すことにより、現代アルザスにおけるアルザス語の位置付けを考察する。

3.1 「アルザス語」について



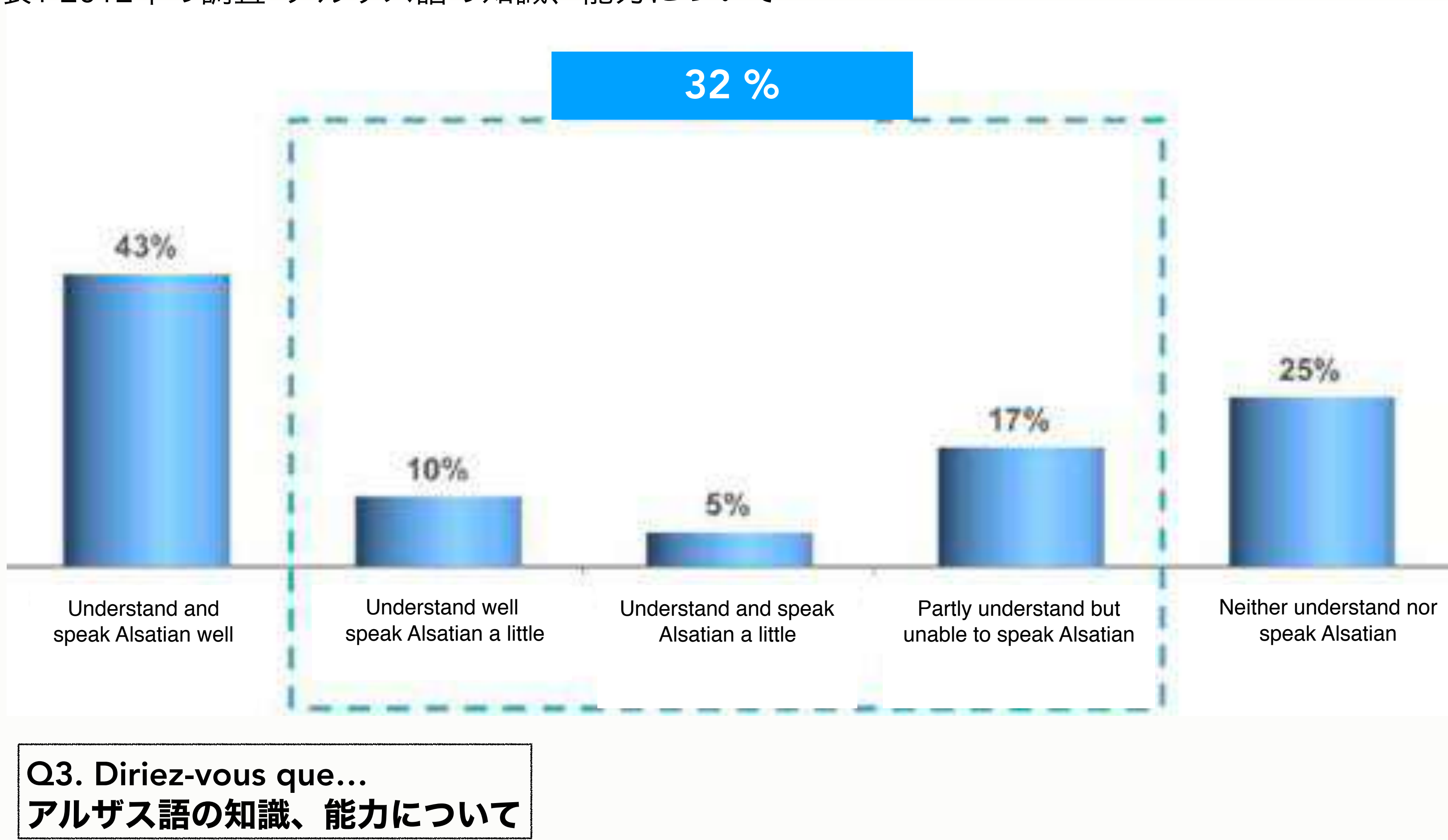
図4 アルザスの言語地図

黄…Francique rhénan lorrain
橙…Francique rhénan méridional
緑…Bas-alémanique du Nord
青…Bas-alémanique du Sud
紫…Haut-alémanique

- 話者数：約50万人（INSEE, 1999）
- UNESCOのAtlas of the world's languages in dangerでは、“Alsatian in France, while part of the Alemannic dialect continuum and therefore not listed separately, is nevertheless included in the current Atlas (UNESCO, 2010, p. 37).”
- アルザス語（Alsatian）はalémanique (Alemannic)と示され、脆弱“vulnerable”というバイタリティ指数が与えられ、数百万人の話者がいるとされる（UNESCO, 2010）（vulnerable、definitely endangered、severely endangered、critically endangered、extinctという区分）[参照：ロレーヌ語はseverely endangeredとして定義されている。]
- Ethnologueではドイツやスイスで話される言語の方言とされ、“‘Alsatian’ in France, ‘Schwaben’ in southwest Germany, and ‘Walser’ in Switzerland.”
- **本報告では、各個人が認識している「アルザス語」や「アルザスの言葉」という表現がどの地域で話されている変種を指すのかという点については踏み込んでいない。**

3.2. 「アルザス語」 について：2012年の調査の結果

表1 2012年の調査 アルザス語の知識、能力について



出典：Office pour la Langue et les Cultures d'Alsace et de Moselle (2012) Etude sur le dialecte alsacien.

4. 言語政策から見る地域語を取り巻く状況



4.1. ヨーロッパにおける地域語

●ヨーロッパにおける地域語

- EUの東方拡大によるマイノリティの顕在化、画一化を招く「グローバル化」に対抗する地域主義の活発化→市民からの地域語擁護の要求が高まる
- ヨーロッパ地域における言語政策は欧州連合・欧州評議会が中心となって進めている。
- 欧州連合は多言語主義、欧州評議会は複言語・複文化主義に則った政策
- 2000年からEUは「多様性の中の統一」をモットーとして掲げる。

● EUという超大国を構成するヨーロッパ諸国における豊かさは多様な文化や言語によって支えられている

● 多言語についての取り組みは欧州という共同体を形作る重要な要素である

EUにおける言語政策は三本の柱を持つ

EUとしての公用語政策

加盟国の全公用語をEUの公用語とし、それらの公用語を平等に扱う。加盟国の「**ナショナル**」言語の多様性を担保する原則。

多言語政策

多言語習得によって異文化相互理解の促進と経済効果をもたらす。言語は人々を結びつけ、他の国やその文化への繋がりを作り、異文化間の理解を強化する。他国に留学する扉を開くだけではなく、国際的な労働市場への参加を可能にする。→EUの競争力を高める

少数言語保護政策

EUの東方拡大による少数者の顕在化や「グローバル化」という名の画一化の動きへの対抗として、地域文化の復興や維持運動がヨーロッパ中で巻き起こり、消滅の危機にあった少数言語の復興運動が盛んになった。→市民からの少数言語保護への要求

4.1. ヨーロッパにおける地域語

- [問題点1] 1992年 欧州地域少数言語憲章→98の条文から34の条文を「アラカルト」のように選ぶことができる（佐野, 2001）
- [問題点2] 第1条の「地域少数言語」の定義において少数言語には、移民の言語は含まれないことが明記

Article 1 – Definitions

- a "regional or minority languages" means languages that are:
 - i traditionally used within a given territory of a State by nationals of that State who form a group numerically smaller than the rest of the State's population; and
 - ii different from the official language(s) of that State; **it does not include either dialects of the official language(s) of the State or the languages of migrants**; (European Charter for Regional or Minority Languages, 1992)

- [問題点3] 多言語主義を基盤として「ナショナル」な言語の多様性を担保する政策は、本来、少数言語保護とは矛盾しうる
 - 「EUの歩みは、本質的なところで「国家の言語による多言語主義」にとどまっているのである。多言語社会を生み出すよりも、ヨーロッパの建設が国家主権を脅かさないことをはっきり示すことの方が、より重要なのである（ジオルダン、1982 [佐野訳、2004、68頁] →EUの言語政策の限界を指摘
 - 複文化・複言語主義を掲げる欧州評議会のヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）の考え方を援用して、2001年「欧州言語年」で提唱された「**母語+2言語**」教育を異言語教育の目標としている（橋内、2010）

4.1. EUの目指す「母語+2言語」教育

- 「母語+2言語」教育では、「+2言語」の区別を明確化することを試みている
- 国際的な言語に加え、個人が採用する言語「養子言語」(Personal Adoptive Language: PAL)をも重視するなどの少数言語を保護する方向性を推進している。
- 国際的な力を持つ言語のみを対象とせず、**個人の意思に基づいて選ばれる言語（「養子言語」Personal Adoptive Language: PAL）を学ぶ**ことの重要性を指摘する（木村, 2021参照）
- だがEUにおける「補完性」の原則に基づき、政策の実施に関しては各加盟国の権限に委ねられているため、具体的な言語政策展開のためにはEU以外の場を利用することが必要である。



- 国内においてナショナルな言語以外を対象とした政策に問題を抱えるフランスのような国もある

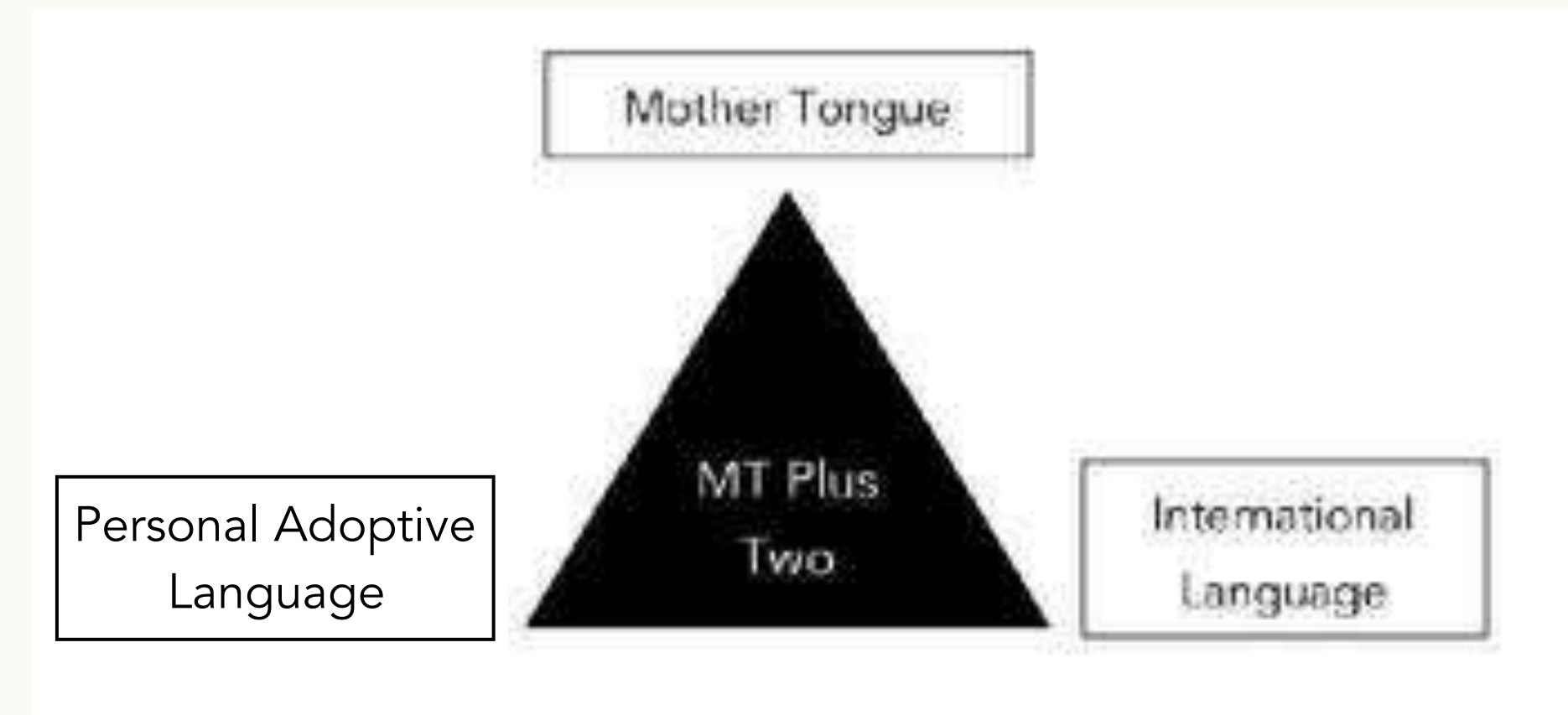


図5 「母語+2言語」教育

出典：発表者が作成

4.2. フランスの言語政策

- フランスは無形文化遺産保護条約や文化多様性の保護促進についての協約においてイニシアチブを発揮するなど、国際社会に対してマイノリティの人々の言語を含めた権利の擁護を率先して行ってきた（長谷川、2009）。
- →しかし、国内における少数者の言語擁護に関しては未だ問題を抱えている。

1992年マーストリヒト条約調印直前での共和国憲法改正

Art. 2 – La langue de la République est le français.
→フランス語が共和国の言語であることを明記

2008年共和国憲法75-1を追記

Art. 75-1 – Les langues régionales appartiennent au patrimoine de la France.
→地域語をフランスの遺産とする。地域言語を守るとは特定の話者集団の権利を守ること并不意味着のではなく、フランス国民全体の豊かさを守るために重要である。

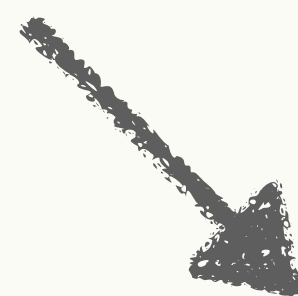
4.2. フランスにおける「地域語」概念

1951年「地方言語および方言の学校教育に関する法案」Loi Deixonne (ディクソンヌ法)

フランスにおいて「地域語 (langue régionale)」という概念が初めて定義された。ここで「地域語」として認められたのはブルターニュ語、バスク語、カタルーニャ語、オック語であり、**アルザス語、コルシカ語、フランドル語は「地域語」として認定されなかった**。この法によって「地域語」と定義された言語は小中高での公教育期間での教育や研究が認められた。1970年からはバカロレアの選択科目として選べるようになった。

地域語として認められなかった言語は**外国語**という位置付けであり、例えば**アルザス語はドイツ語という外国語の方言**として見なされたため、国内の地域語としては認められなかった。その後、これらの地域では「方言 (dialect)」や「俚言 (patois)」ではなく「地域語」であることを示すために、辞書の作成や正書法の整備が行われ、これらの言語は地域語に加えられた。

※アルザス語については、標準アルザス語が確立していないため、“aux langues régionales d’Alsace”、“aux langues régionales des pays mosellans”と複数の言語として認識されている。



このように地域語の整備が行われてきているが、しかし、これらの地域語が住民によって日常的な使用がされているとは言い難い状況にあるという指摘もある (長谷川、2000)

4.2. フランスにおける地域語

- フランスにおける地域語での教育政策は地域によって異なった形態を持つ

表2 フランス国内の地域語教育方針



図6 フランスの地域言語分布地図

図の出典情報は参考資料に提示

言語教育方針	地域	
民間文化団体 (Association)の教育活動を中心とした学校教育	アルザス	OLCAが統括し、複数の民間団体が教育を担う。 -Centre culturel alsacien -Alsace Junge fers Elsassische (AJFE) など
	ブルターニュ バスク 北カタルーニャ オクシタニア	-ブルターニュ Diwan -バスク Ikasbi -北カタルーニャ Bressola -オクシタニア Calandreta
	コルシカ	週3時間の教育（LCC） 初等教育イマージョン 地中海セクション アトリエ科目

4.3. アルザス語の歴史

1871-1918	プロイセン時代	アルザスは他の領邦とは異なり、自治権が与えられていかなかった。 フランス語は公的領域では禁止、標準ドイツ語使用が求められる。 50%以上がフランス語話者の町では学校でのフランス語使用が許可 e.g. Bruche Valleyの学校ではフランス語とドイツ語の二言語使用
1918-1940	フランス時代	machine arrièreをスローガンとして1871年以前の状態に戻すことが試みられる。 両親がドイツ生まれであった場合、アルザスから追放。 1918年時点：90%以上が非フランス語話者 1936年：フランス語話者55.63%、ドイツ語話者76%、アルザス語話者82% (INSEE, 1936)
1940-1945	ドイツ時代	ナチスによる統治、 ドイツ語がアルザスの公用語とされる。教育の場でもドイツ語が使用される。 フランス語の書籍、雑誌の販売の禁止。 アルザスの県知事による発言«serait absurde de croire que le fait de parler l’alsacien implique que l’on a des sentiments allemands», «de parler autant que possible français, particulièrement dans les lieux publics, quand ils connaissent la langue nationale, ce qui est le cas de beaucoup de jeunes.» (Huck, 2015). 「アルザス語を話すということが、ドイツ語の感情を持っていることを意味すると考えるのは馬鹿げている」 「特に公共の場では、多くの若者のように国語を知っている場合は、できるだけフランス語を話すように」
1945-	フランス時代	“C’est chic de parler français ”のスローガンのもと、ドイツ語が禁止される。 1952年からドイツ語教育が許され始める。

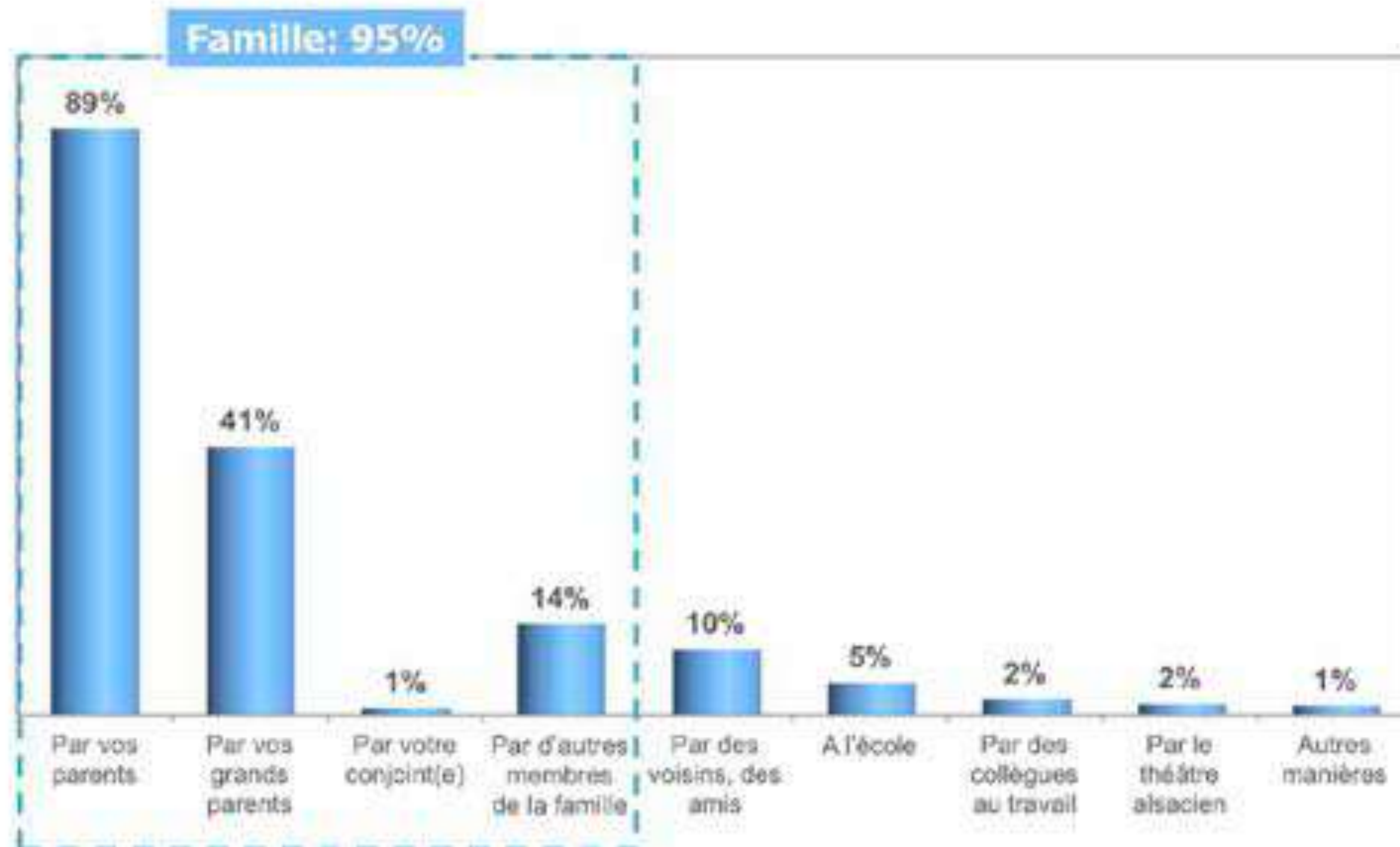


図7 C’est chic de parler français ポスター

出典：Huck(2006), Huck, Arlette and Geiger-Jaillet (2007), L’Institut National de la Statistique et des Études Économiques (1936),中本 (2008), Huck (2015)より

図の出典情報は参考資料に提示

表3 2012年の調査 アルザス語の習得方法について



Q12. Comment avez-vous appris à parler alsacien ?
どのようにアルザス語を話すことを習得しましたか。

- 大部分が家族内での使用にとどまり、学校や職場での使用は少数

4.3. アルザス語使用調査

表4 フランス語/アルザス語/ドイツ語の言語知識 (1962)

年齢（歳）	フランス語	アルザス語	ドイツ語
5-9	81.73%	77.05%	3.52%
10-19	98.17%	81.10%	34.66%
20-29	98.40%	81.49%	62.39%
30-39	96.62%	84.42%	78.13%
40-49	94.44%	85.20%	80.49%
50-59	76.02%	91.64%	87.17%
60-74	44.89%	93.88%	90.61%
75-	35.18%	93.74%	89.08%
全世代	82.52%	85.71%	65.19%

出典：Office pour la Langue et les Cultures d'Alsace et de Moselle (2012) Etude sur le dialecte alsacien.

4.3. アルザス語使用調査

表5 1962から1998年での年代別アルザス語話者

年齢（歳）	1962	1979	1986	1991	1998
18-24	82.40%	65.50%	52.20%	40%	37%
25-34	86.40%	64.30%	58.40%	-	44%
35-49	86.90%	71.50%	73.30%	-	65%
50-64	92.60%	84.20%	85.30%	-	75%
65-74, 65以上	94.60%	88.30%	90.70%	-	84%
全世代	84.70%	74.70%	71.70%	67%	62%

出典：Office pour la Langue et les Cultures d’Alsace et de Moselle (2012) Etude sur le dialecte alsacien.に基づき発表者が作成

4.3. アルザス語使用調査

表6 1998年の年代別アルザス語能力

年齢 (歳)	よく話す	時々話す	理解できるが話 さない	理解できず 話さない	アルザス語を話 さない
18-24	22%	15%	24%	39%	63%
25-34	33%	11%	27%	29%	56%
35-49	49%	16%	13%	22%	35%
50-64	67%	8%	13%	12%	25%
65以上	79%	5%	10%	6%	16%
全世代	51%	11%	17%	21%	38%

出典：Office pour la Langue et les Cultures d'Alsace et de Moselle (2012) Etude sur le dialecte alsacien.

4.3. アルザス（Bas-Rhin地域）における言語事情：言語教育

- Bas-Rhinにおけるバイリンガル教育は、*Préfecture de la région Grand Est*と*Académie de Strasbourg*が数年に一度話し合いを行い、政策を策定。最新版 *Convention opérationnelle portant sur la politique régionale plurilingue dans le système éducatif en Alsace Période 2018- 2022.* が2018年に策定された。

- “Tous les étudiants qui visent la profession de professeur des écoles dans les deux départements alsaciens sont préparés **à l’enseignement de la langue régionale d’Alsace**. Tous les professeurs des écoles stagiaires, à compter de septembre 2022, **doivent être en capacité d’assurer l’enseignement de la langue régionale d’Alsace** (Préfecture de la région Grand Est & Académie de Strasbourg, *ibid.*, p.3)”. Bas-RhinとHaut-Rhinで学校の教師を目指す全ての学生は**アルザスの地域言語**を教える準備ができている。2022年9月から研修課程における全ての教師は、**アルザスの地域言語**を教えることができないといけない。
- “La langue régionale d’Alsace sous **ses deux formes: l’allemand standard et les dialectes pratiqués en Alsace** (Préfecture de la région Grand Est & Académie de Strasbourg, 2018, p. 2)”. アルザスの地域言語は標準ドイツ語とアルザスで使用する方言の二つの形があります。



5. 研究手法

5.1. 言語景観研究 (Linguistic Landscape)

5.2. 半構造化非公式インタビュー

5.1. 言語景観研究

- 1997年にLandry&Bourhisによって明確な定義が与えられ、1990年代から現在に至るまで都市の公共空間における言語状況を観察するための手法として発展してきた。
- The language of public road signs, advertising billboards, street names, place names, commercial shop signs, and public signs on government buildings combines to form the linguistic landscape of a given territory, region, or urban agglomeration. The linguistic landscape of a territory can serve two basic functions: as informational function and a symbolic function (Landry&Bourhis, 1997, p. 25). → **言語景観は情報伝達機能と象徴的な機能を持つ。**
- The production and display of such messages are in no way trivial or insignificant. On the contrary, they are used to mark a given space even if only symbolically, to mark oneself out as different from others or to express one's identity in various ways and through a different process (Bogatto and Hélot, 2010, p. 17). → **象徴的に使用されていたとしても、それは自分を他の人とは異なるものとして示すため、自分のアイデンティティを表現するため**
- 公共標識（public sign）、私的標識（private sign）を区別して、採取・観察する場合が多い（Backhaus, 2007）。 → 本研究もこの区分を採用する。
- 何語で書かれているかに着目する量的調査として始まったが、2000年代になってからはインタビューなども含めた質的調査や、掲示物の言語以外も分析対象とする記号論的な視点も加えられるようになった（Bolton, Botha & Lee, 2020）。

5.1. ストラスブールにおける言語景観調査

- ストラスブールでのFrançois Bogatto & Christine Hélot(2010)によって最初に行われ、続いてChrista Burdick (2012)により実施された。
- Bogatto & Hélot(2010)は、「Quartier Gare」周辺で、通りのレストランや小売店の店先の看板などの言語使用を調査。**アルザス語は主に公共標識**において用いられ、ドイツ語は量的かつ機能的にも限られた役割で主にドイツ人観光客に向けて書かれる。英語は意味伝達だけでなく、**国際都市の象徴**として使用されている（Piller (2016) に言及）。
- Burdick (2012)はストラスブールの観光地エリア、La Petite Franceと大聖堂周辺の通りで実施。多言語表記標識の52%がアルザス語を含む。（大部分が街路名）観光地のレストランにはアルザス語が、地域性を表すために使用されている。（e.g. カフェやバーを表すwinstubs, bierstubs の使用）
- →本研究は観光地でもあり、地元の人々も日常的に訪れる広場に着目する。

● 調査概要



図8 ストラスブール市街

出典：l'Office de Tourisme de Strasbourg et sa Région (n.d.)

丸印は発表者が追加

- 2019年7月～8月中頃
- ストラスブール中心街の広場周辺
- 標識の大きさにかかわらず街路名やメニューも含めて採取



図9 クレベール広場



図10 グーテンベルク広場



図11 大聖堂広場

5.2. 半構造化非公式インタビュー

- 下記二つのポイントを中心に質問を行いながら、話を遮らずにインタビュー主導で話をしてもらう。人によって聞き取りの時間、量、内容にばらつきがある。

① 日常生活での言語使用（お店・家族・隣人など）

② アルザス語について（使用するか、しないか、家族や村の人々の使用など）

- 許可を得た場合はiPhoneでの録音、即時的なインタビューの際は参与観察ノートに会話をメモ、後日書き起こし。

5.2. 半構造化非公式インタビュー

表7 インタビューーの情報

名（仮名）	年代	職業	出身地	話者情報	家族などの言語使用
Valérie	60s	古本市の書店員	Alsace (near Vosges)	-アルザス語話者	
Cédric	50s	古本市の書店員	Alsace (Cléstat)	-アルザス語を理解するが、話さない	-両親はアルザス語話者
Ludovic	60s	古本市の書店員	Alsace	-アルザス語話者	
Pauline	50s	観光案内所の従業員	Alsace (Mietesheim)	-アルザス語話者	-パートナーは非アルザス語話者
Laurence	30s	OLCAスタッフ	Strasbourg	-アルザス語話者	-パートナーはアルザス語学習者 -子供の第一言語はアルザス -家族の共通言語はアルザス語
Arnaud	20s (22)	ストラスブール大学学生	Alsace (Sondernach, Colmar)	-アルザス語話者	-家族はアルザス語話者

6. 調査結果/考察

6.1. 調査結果①言語景観



334枚撮影

内訳：公共標識68枚

私的標識266枚

6.1. 調査結果：公共標識



表8 公共標識の多言語表記

表示言語の数 (言語)	n
1	33
2	14
3	20
4+	1
n	68

出典：発表者がデータに基づき作成

- 1 言語表記が最も多い→フランス語
- 3言語表記＞2言語表記

出典：発表者がストラスブールにて撮影 (2019)

6.1. 調査結果：公共標識



表9 公共標識における多言語表記

言語	n
フランス語のみ	33
フランス語 + 英語 + ドイツ語	20
フランス語 + アルザス語	10
フランス語 + 英語	4
フランス語 + 英語 + ドイツ語 + イタリア語 + スペイン語 + 中国語 + ロシア語	1
n	68

出典：発表者がデータに基づき作成



フランス語

アルザス語

- フランス語が最優先言語
- フランス語/英語/ドイツ語の三言語表記が次いで多い
- フランス語とドイツ語の組み合わせは見られない
- アルザス語は街路名のみ

6.1. 調査結果：私的標識



表10 私的標識の数

表示言語の数	n
1	184
2	31
3	49
4+	2
n	266

出典：発表者がデータに基づき作成

出典：発表者がストラスブールにて撮影 (2019)

6.1. 調査結果：私的標識

表11 私的標識における表記言語

表記言語	n
フランス語のみ	180
フランス語+英語+ドイツ語	47
フランス語 + 英語	19
フランス語 + ドイツ語	8
英語のみ	4
フランス語 + アルザス語	2
フランス語 + アラビア語	2
フランス語 + 英語 + 中国語	2
フランス語 + 英語 + ドイツ語 + スペイン語	1
フランス語+ 英語 + ドイツ語 + スペイン語 + イタリア語 + ロシア語 + 日本語	1
n	266

出典：発表者がデータに基づき作成

- 「フランス語のみ」と「フランス語/英語/ドイツ語」の3言語表記が優勢→公的標識と同じ
- アルザス語は少数 (e.g. Flammekueche)



タルトフランベ（フランス語）・フラムクーヘ（アルザス語）はアルザス地域の伝統料理

公共/私的標識における主要言語

表12 公共/私的標識における主要言語と特徴

	公共標識	私的標識
フランス語	最優先言語 (最上部に書かれる)	最優先言語 (最上部に書かれる)
英語	二番目に優先される言語	二番目に優先される言語 英語のみでの使用もあり
ドイツ語	フランス語/英語と 共に使用される	フランス語/英語と 共に使用される
アルザス語	街路名	少数だが、アルザスの文化的な表現と結びつく

アルザス語の公共空間での使われ方

- アルザス語は建物の位置を示すためや詳細な情報を提供することを目的としては使用されていない。e.g. 英語やドイツ語との比較
- この地域の地名の歴史や文化的なものを指し示すためにしようされている
 - → 象徴的な言語使用 (symbolic function) (Landry&Bourhis, 1997).
 - → アルザスという「地域性」を強調するための資源として、地域言語が用いられている。Bogatto and Hélot (2010)の指摘する「アイデンティティ」
 - → ユネスコの世界遺産登録との関わり。



6.2. 調査結果②半構造化非公式インタビュー

表13 インタビューーの情報

名	年代	職業	出身地
Valérie	60s	古本市の書店員	Alsace (near Vosges)
Cédric	50s	古本市の書店員	Alsace (Cléstat)
Ludovic	60s	古本市の書店員	Alsace
Pauline	50s	観光案内所の従業員	Alsace (Mietesheim)
Laurence	30s	OLCAスタッフ	Strasbourg
Arnaud	20s (22)	ストラスブール大学学生	Alsace (Sondernach, Colmar)



調査結果②半構造化非公式インタビュー

● Valérie

- “*L’alsacien, ce n’est pas la langue préférée. Je préfère l’italien et l’anglais.*”（アルザス語、それは私の好きな言語ではない。私はイタリア語と英語の方が好きである。）
- “*L’alsacien, c’est la langue disparue.*”（アルザス語は、それは消滅した言語である。）
- “*L’alsacien, la langue lourde, pas la langue légère, de beauté.*”（アルザス語、重い言語、軽くない、美しくない言語）

表14 インタビューイの情報

名	年代	職業	出身地
Valérie	60s	古本市の書店員	Alsace (near Vosges)



調査結果②半構造化非公式インタビュー

● Cédric

- “*L’alsacien est la langue secrète.*”（アルザス語は、秘密の言語である。）→両親がアルザス語話者、アルザス語は両親が「秘密の」会話をする時に用いていた。
- “*L’alsacien, la langue sèche.*”（アルザス語、乾燥した言語）

表15 インタビューイの情報

Cédric	50s	古本市の書店員	Alsace (Cléstat)
--------	-----	---------	------------------

出典：発表者がデータに基づき作成



調査結果②半構造化非公式インタビュー

● Ludovic

- “*L’alsacien, c’est le patois, le dialecte.*” (アルザス語、それはパトワ、方言である。)
- → 「何言語話しますか」という質問に対して、アルザス語は言語ではないからフランス語とドイツ語の二言語だと返答。

表16 インタビューイの情報

Ludovic	60s	古本市の書店員	Alsace
---------	-----	---------	--------

出典：発表者がデータに基づき作成



調査結果②半構造化非公式インタビュー

● Pauline

- “Je leur parle beaucoup l’histoire et tradition. Je suis très alsacienne. Mais, ce que je regrette, c’est que je relègue parler plutôt ça je regret que je ne pas l’avoir fait.”（私は、彼ら（子供や孫）に（アルザスの）歴史と伝統についてたくさん話します。私はとてもアルザス人です。しかし、私が後悔しているのは、それ（アルザス語を話すこと）をしなかったことよりも、彼らをアルザス語を話すことを放棄したことです。）
- “Ce serait dommage que ça disparaît complètement. Je ne suis pas d’accord, non plus (c’est disparu). Mais... je pense que c’est important de garder, c’est la racine （（アルザス語が）完全に消滅してしまうのは残念です。私はアルザス語が消滅したとは思っていません。しかし私はアルザス語を守ることが大切だと思う。それはルーツ。）。”

表17 インタビューーの情報

Pauline	50s	観光案内所の従業員	Alsace (Mietesheim)
---------	-----	-----------	---------------------

出典：発表者がデータに基づき作成



調査結果②半構造化非公式インタビュー

● Laurence

● [アルザス語のイメージ形成]

- “La langue comme, même encore d’image, mauvaise image enfin, qui est peut-être un petit peu mieux qu’il y a vingt et trente ans, mais ça reste une langue pas valorisé...Il y a peut-être des parents qui ne sont pas d’accord que l’enfant aprenne l’alsacien.”（（アルザス語は）まだ否定的なイメージである。20年前や30年前よりも少し良いかもしれない。しかしそれは未だに価値のない言語です。子供が学校でアルザス語を学ぶことに同意しない親もいるかもしれない。）
- “C’est nous, travaillant à l’OLCA, d’essayer d’associer d’alsacien à quelque chose positive de nouveau. Les jeunes qui trouvent que c’est plutôt sympa, l’alsacien. Donc, voilà on essaie un petit peu de changer aussi des mentalités”（OLCAで働く私たちは、アルザス語を何か新しいポジティブなものと関連づけようとしている。若い人たちが「良い」と思えるアルザス語。だからここで私たちはアルザス語への見方（考え方）を少し変えようとしている。）

表18 インタビューイの情報

Laurence	30s	OLCAスタッフ	Strasbourg
----------	-----	----------	------------

出典：発表者がデータに基づき作成



調査結果②半構造化非公式インタビュー

● Laurence

● [アルザスとドイツの関係性]

- “*C’est d’abord toujours les deux ensemble. On a toujours les deux ensemble*”（まず、それ（アルザスとドイツ）は常に一緒。いつも二つは一緒にいる。）
- “*La base est l’allemand pour arriver à lire l’alsacien.*”（ドイツ語の知識を持っていることは、アルザス語を読めることに繋がる。）
- “*En Alsace, en espèce de trilinguisme naturelle avec l’alsacien qui était plus pour le quotidien, qui peuvent écrire l’allemand qui était la langue parfois de l’administration parce que on a été allemand beaucoup.*”（アルザスでは、行政の言語であったドイツ語と日常生活のためのアルザス語使用という自然な3言語使用が見られた。なぜなら私たちはずっと「ドイツ人」であったから。）



調査結果②半構造化非公式インタビュー

- Arnaud
 - “(L’alsacien) C’est un peu une forme d’identité justement de la region, le dialect. Donc après qu’il disparaît, ce serait dommage. Ce serait un peu dommage pour tous les français.” （（アルザス語）それはアイデンティティの一種で、特に地域の。だからアルザス語が消滅した後それは残念です。それは全てのフランス人にとって残念です。）
 - “(L’alsacien) Ça, c’est pratique” （（アルザス語）それは便利である。）→旅行先などで、他の人に分からない話をするためにアルザス語を用いる例を挙げる。

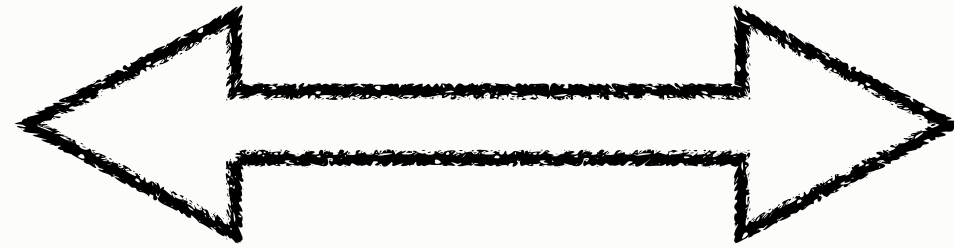
表19 インタビューイの情報

Arnaud	20s (22)	ストラスブール大学学生	Alsace (Sondernach, Colmar)
--------	----------	-------------	-----------------------------

出典：発表者がデータに基づき作成

調査結果②半構造化非公式インタビュー

否定的

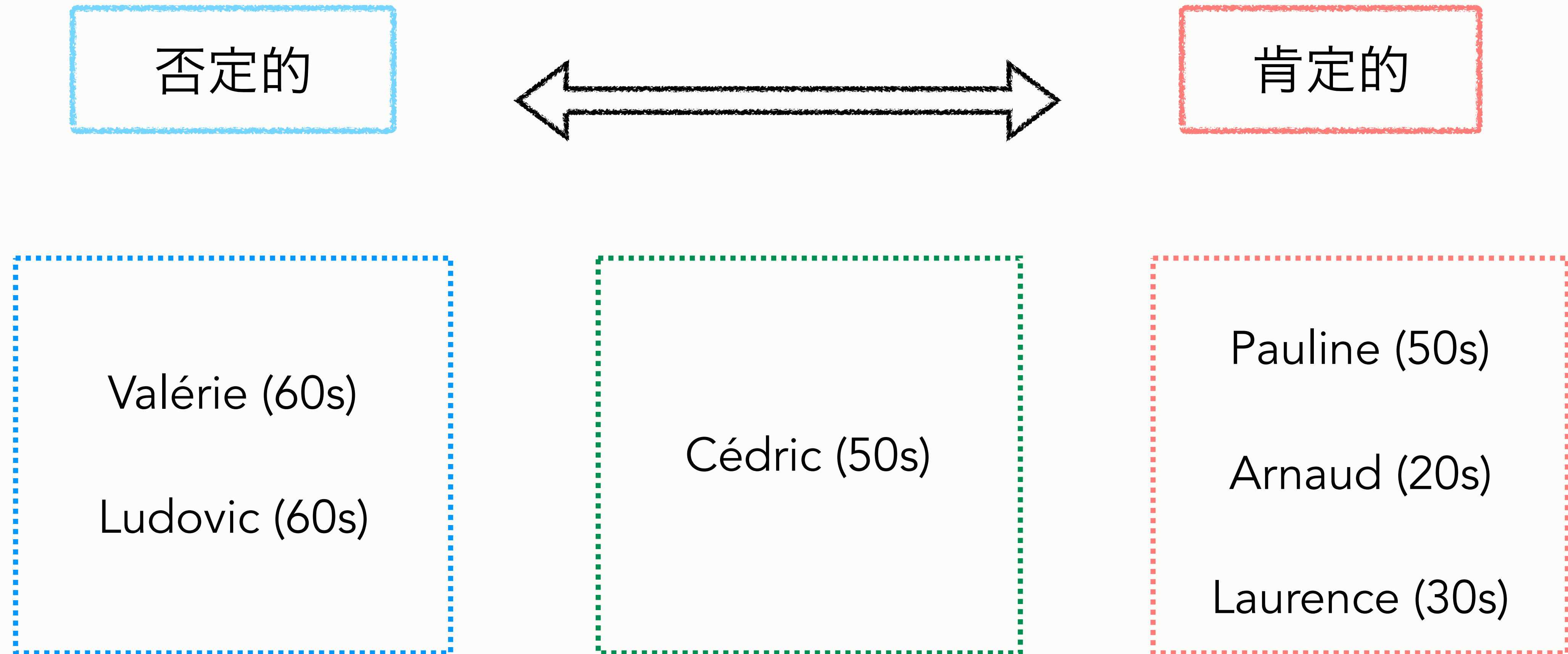


肯定的

- inférieur, patois (Ludovic)
- la langue sèche (Cédric)
- pas beauté, pas préféré (Valérie)

- racine (Pauline)
- important (Pauline)
- identité de la région (Arnaud)
- richesse (Laurence)
- pratique (Arnaud)

調査結果②半構造化非公式インタビュー



結果からの考察/まとめ

- 公共空間での言語使用からはアルザス語は地域的な象徴として使用されている。
- インタビューからは、アルザス語に対する認識は個々人の家族構成や家族のアルザス語に対する認識の影響を受ける。
- →アルザス語は公教育の場で学習されているわけではないため（Bas-Rhinにおける言語政策の部分で言及）、その学習が家庭内に留まる。家庭内での言語意識の影響を受ける可能性が高まる。
- 年代という属性、職業という属性との関わり→Pauline、Laurenceはアルザス語やアルザスの歴史や文化に関わる仕事をしている。
- 地域語アルザス語をどのように活性化することができるのか

7. 結び：地域語アルザス語の未来

言語政策からみるアルザス語： 母語プラス二言語教育アルザスモデル

- “La base est l’allemand pour arriver à lire l’alsacien (Laurence).”
- この境界地域においては、ドイツ語という一国家の言語を通して地域語であるアルザス語学習へと繋げることができるのではないか。
- アルザス地域がドイツとの国境に位置しており、アルザス語がゲルマン系諸語であるために可能となる方策。アルザスの境界性を生かした政策。

→現在はドイツ語までで留まっている状態であり、それをアルザス語まで向かうようにすることが重要。

→アルザス語はパトワとして烙印を押されてきた過去を持つ。これをどのように克服すべきか、という問題が大きく立ちはだかる。

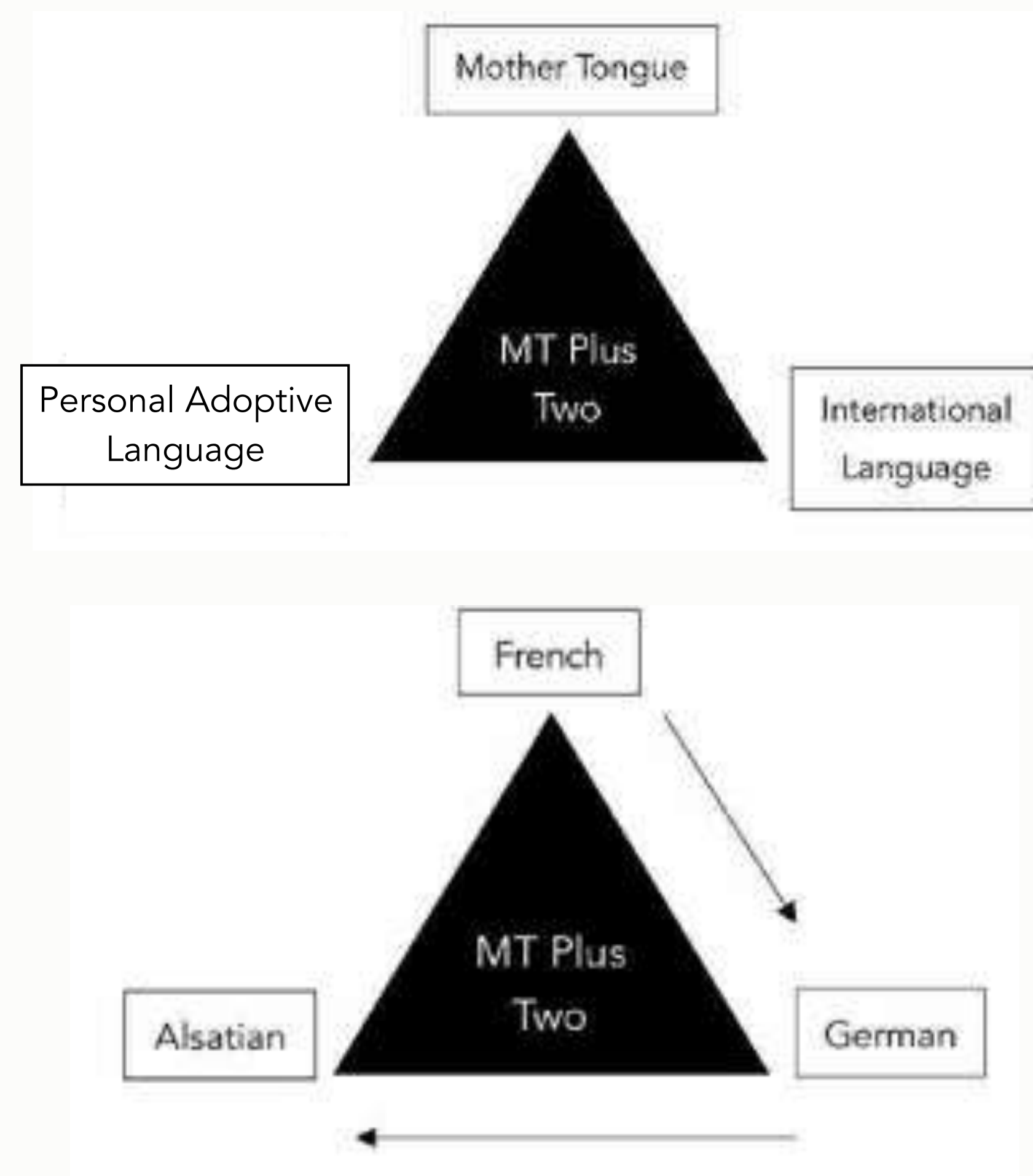
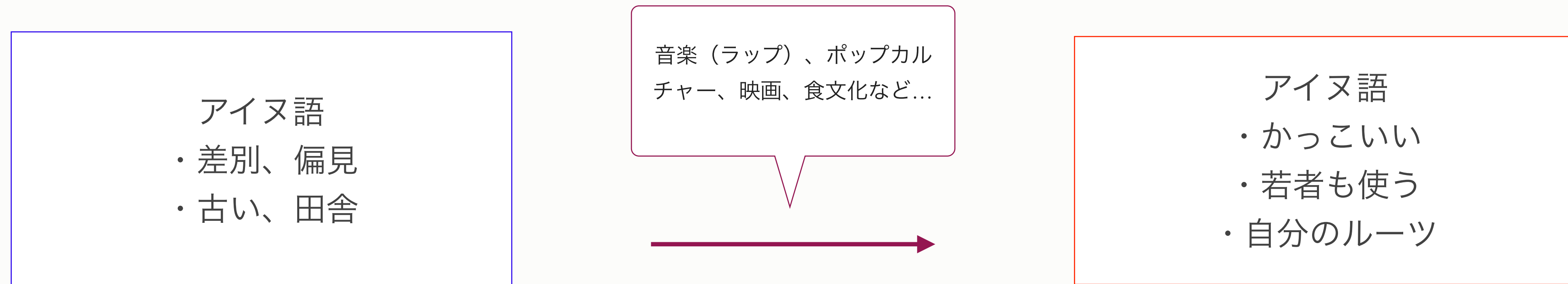


図12 母語プラス二言語教育アルザスモデル

地域語への否定的な認識を乗り越えるために

●「メトロエスニシティ」

- 「メトロエスニシティ」はMaher (2005, 2010)によって生み出された
- 差別や偏見の対象となったことのある地域語を、トップダウンの政策ではなく、ボトムアップの力を高めることによって復興、再活性化させるための方法。
- アイヌ語やアイヌらしさを、「かっこいい」ルーツという概念に置き換えることにより、過去の歴史を連想させる伝統的なエスニシティではなく、より「ライト」なエスニシティを連想させる。メトロエスニシティを用いることにより、アイヌ語に対するイメージを変えていくことができるのではないか、という主張
- 地域語復興のために、まずは地域語へのイメージを音楽や映画、食文化などの文化的な活動から改善していくことが必要であり、有効なのではないか。**



8. 残された課題/今後の課題

- 言語景観について... 4つの言語（フランス語、英語、アルザス語、ドイツ語）を対象としたが、アラビア語、中国語も少数だが観察できたため、そちらの質的調査も可能ではないか。
- 本調査のインタビューは、即時インタビューを行ったため情報提供者のばらつきがあった点。年代や家族構成、出身地/居住地などを揃える、もしくは比較できるだけの数を集めて、インタビューを行う必要がある。
- 本報告では、各個人が認識している「アルザス語」がどの地域で話されているものかという点については踏み込まなかった。次に執筆する修士論文では、社会言語学における変異理論を用いてアルザス語のバリエーションについて扱う予定である。

9. 参考文献

- Backhaus, P. (2007). *Linguistic landscapes: comparative study of urban multilingualism in Tokyo*. Bristol: Multilingual Matters.
- Bister-Broosen, H. & Willemys, R. (1998). French-German Bilingual Education in Alsace, *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 1(1), pp. 3-17.
- Bogatto, F., & Hélot, C. (2010) Linguistic Landscape and Language Diversity in Strasbourg: The « Quartier Gare ». In Shohamy, E., Ben-Rafael, E. & Barni, M. (Eds.), *Linguistic Landscape In The City* (pp.275–291), Bristol: Multilingual Matters.
- Bolton, K., Botha, W., & Lee, S–L. (2020). Linguistic Landscapes and Language Contact. In Hickey, R. (Ed.). *The Handbook of Language Contact, Second Edition*, pp. 281–300, Hoboken: Wiley-Blackwell.
- Boughton, Z. & Pipe, K. (2020) Phonological variation and change in the regional French of Alsace: Supralocalization, age, gender and the urban–rural dichotomy, *Journal of French Language Studies*, 30, pp. 327–353
- Burdick, C. (2012). Mobility and Language in Place: A Linguistic Landscape of Language Commodification. *CHESS Student Research Reports*, pp. 1-43.
- Centre d’information sur les Institutions Européennes (n.d.). The European Vocation of Strasbourg. Retrieved June 9, 2021, from <https://www.strasbourg-europe.eu/the-european-vocation-of-strasbourg/>
- Connor, J. E. (2019). “The Langue d’Oc Is Bringing People Together”: Debating the Place of Regional Languages in France. *Journal of Linguistic Anthropology*, 29 (2), pp. 249—270.
- Conseil de l’Europe/Europarat (2018). Les noms de rues de la Ville de Strasbourg. Retrieved January 2, 2021 from <https://rm.coe.int/ecrml-noms-rues-strasbourg-16x24/16807bcf59>
- Council of Europe (1992). European Charter for Regional or Minority Languages. *European Treaty Series*, 148. Retrieved January 2, 2021 from <https://rm.coe.int/CoERMPublicCommonSearchServices/DisplayDCTMContent?documentId=0900001680695175>
- Eugène, P. (1978). *L’Alsace face à son destin: la crise d’identité*. Strasbourg: Société d’Edition de la Basse-Alsace.
- European Commission (2015). *Europe without borders: The Schengen area*. Retrieved from https://ec.europa.eu/home-affairs/sites/homeaffairs/files/e-library/docs/schengen_brochure/schengen_brochure_dr3111126_en.pdf
- European Parliament (2020). Fact Sheets on the European Union: Language Policy. Retrieved January 3, 2021 from https://www.europarl.europa.eu/ftu/pdf/en/FTU_3.6.6.pdf
- European Union (1985). Schengen Declaration. Retrieved January 2, 2021 from <https://eur-lex.europa.eu/legal-content/EN/ALL/?uri=CELEX%3A42000A0922%2801%29>

9. 参考文献

- European Union (n.d.). EU Languages. Retrieved January 3, 2021 from https://europa.eu/european-union/about-eu/eu-languages_en
- FRANCE 24 English (2018). French regional accents: source of pride or discrimination?. Retrieved January 2, 2021 from <https://youtu.be/bO5eq6dOPok>
- France's Constitution of 1958 with Amendments through 2008 (2008). Retrieved January 2, 2021 from https://www.constituteproject.org/constitution/France_2008.pdf?lang=en
- Gardner-Chloros, P. (1991). Language Selection and Switching in Strasbourg. Oxford University Press: UK.
- Gorter, D. (2006). Introduction: The Study of the Linguistic Landscape as a New Approach to Multilingualism. *International Journal of Multilingualism*, 3(1), pp. 1–6.
- Gorter, D. & Cenoz, J. (2007). Knowledge about Language and Linguistic Landscape. In Hornberger, N.H. (Chief Ed.). *Encyclopedia of Language and Education*, 2nd revised edition, (pp. 1– 13), Berlin: Springer.
- Gorter, D. & Cenoz, J. (2007). Knowledge about Language and Linguistic Landscape. In Hornberger, N.H. (Chief Ed.). *Encyclopedia of Language and Education*, 2nd revised edition, (pp. 1– 13), Berlin: Springer.
- handbook of language and globalization* (pp. 366–385), London: Wiley-Blackwell. Blommaert, J. (2013). *Ethnography, Superdiversity and Linguistic Landscapes: Chronicles of Complexity*. Bristol: Multilingual Matters.
- Harrison, M. (2016). Alsatian versus Standard German: Regional Language Bilingual Primary Education in Alsace, *Multilingua*, 35(3), pp. 277–303.
- Huck, D. (2006). L'enseignement de l'allemand à l'école primaire en Alsace entre 1945 et 1985 (Teaching German in primary school in Alsace between 1945 and 1985). *Revue d'Alsace*, 132, pp. 337-406.
- Huck, D., Bothorel-witz, A., and Geiger-Jaillet, A (2007). L'Alsace et ses Langues. Eléments de description d'une situation sociolinguistique en zone frontalière. *Université de Strasbourg*, Strasbourg.
- Huck, D. (2015) *Une histoire des langues de l'Alsace*, Strasbourg : La Nuée bleue.
- INSEE, Barre, C., and Vanderschelden, M. (1999). Insee - Population - L'enquête "Etude de l'histoire familiale" de 1999.
- Kimura, G.C. (2017). Signs of De-territorialization? Linguistic Landscape at the German-Polish Border. *Eurasia Border Review*, 8, pp. 45–58.
- Landry, R. & Bourhis, R. Y. (1997). Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology*, 6, pp. 23-49.
- Laeufer, C. (2012). Factors influencing borrowing patterns for nasal vowels: The example of Alsatian (and other German language varieties. *Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik*, 79(3), pp. 253- 297.
- Maher, J. C. (2005). Metroethnicity, language, and the principle of Cool. *International Journal of The Sociology of Language*, pp. 83-102.
- Maher, J.C. (2010). Metroethnicities and Metrolanguages. In Coupland, N. (Ed.). *The Handbook of Language and Globalization* (pp. 575-591), Singapore: Wiley-Blackwell.
- 三木一彦（2007）「フランスにおける地域言語の推移と現状—アルザス・アキテーヌ・ブルターニュを事例として」『教育学部紀要』文教大学教育学部, 41, pp. 21-29.
- 三木一彦（2003）「アルザスにおける言語の現状とその地域性」『教育学部紀要』文教大学教育学部, 37, pp.113-124.
- Office pour la Langue (2012) Etude sur le dialecte alsacien. Retrieved January 2, 2021 from https://www.olcalsace.org/sites/default/files/documents/etude_linguistique_olca_edinstitut.pdf
- 佐野直子（2001）「言語的人権」についての批判的考察-欧州地域少数言語憲章と「少数言語」」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』11, pp. 147-158.
- Steiblé, L.&Bernhard, D. (2018), Pronunciation Dictionaries for the Alsatian Dialects to Analyze Spelling and Phonetic Variation. 11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference, 7-12 May 2018, May 2018, Miyazaki, Japan.
- 庄司博史, P.バックハウス, F.クルマス（2009）『日本の言語景観』三元社.
- Young, A. S. (2014) Unpacking teachers' language ideologies: attitudes, beliefs, and practiced language policies in schools in Alsace, France, *Language Awareness*, 23(1-2), pp. 157-171.

9. 参考資料

[図/画像]

- 図1 Britannica, T. Editors of Encyclopedia (2017, September 22). Picardy. Encyclopedia. Retrieved June 9, 2021, from <https://www.britannica.com/place/Picardy>
- 図2 Alsace à vélo (n.d.). Carte Touristique Alsace. Retrieved January 3, 2021, from <https://www.elzasopdefiets.nl/telechargements/sites-a-visiter-et-activites/item/carte-touristique-alsace.html>
- 図3 Le Grand Est (n.d.). Retrieved June 9, 2021, from <https://www.france-pub.com/region-alsace-champagne-ardenne-lorraine.php>
- 図4 Office Pour la Langue et les Cultures d'Alsace et de Moselle () Carte linguistique de l'Alsace (n.d.). Carte linguistique de l'Alsace. Retrieved September 22, 2021, from <http://www.olcalsace.org/fr/carte-linguistique-de-l-alsace>
- 図6 Français 2de, Livre scolaire (2019), p.14. Retrieved September 22, 2021, from <https://fr.calameo.com/read/000596729e999c1493a30>
- 図7 Mémorial d'Alsace-Moselle, Schirmeck (1945) Retrieved January 4, 2021, from <https://www.fondationresistance.org/documents/cnrd/Doc00273.pdf>
- 図8 l'Office de Tourisme de Strasbourg et sa Région (n.d.). Retrieved January 4, 2021, from <https://www.myststrasbourg.com/en/strasbourg-maps>
- 図9 Place Kléber (2017) Retrieved January 2, 2021 from <https://pixabay.com/photos/place-kl%C3%A9ber-strasbourg-france-2411545/>
- 図10 Truong-Ngoc, C. (2013). Strasbourg place Gutenberg, Retrieved January 2, 2021, from https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/6/65/Strasbourg_place_Gutenberg_novembre_2013_04.jpg
- 図11 Beckendorf, J. (2003) Place de la Cathédrale, Retrieved January 2, 2021, from https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Place_de_la_Cath%C3%A9drale,_Strasbourg.jpg

ご静聴ありがとうございました

本日の発表のご感想・ご意見、資料などメールで送ってくださっても
大歓迎です。どうぞ宜しくお願いします。

rei.sugiura.alsace@gmail.com